

Title	偶然の観念について
Sub Title	L'idee de hasard
Author	西山, 晃生(Nishiyama, Teruo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2007
Jtitle	哲學 No.118 (2007. 3) ,p.205- 220
JaLC DOI	
Abstract	<p>Nous disons pour un evenement qu'il est le resultat d'un hasard, et pour un autre evenement, nous ne le disons pas. Alors quelle est la difference entre les deux? Dans quelle condition un evenement est appele fortuit? C'est notre premiere question. Et pourquoi nous avons idee de hasard plutot que nous ne l'avons pas? C'est la seconde question. Nous essayons de repondre a ces deux question, a l'aide de deux theories de hasard, celle de Cournot et celle de Bergson. Pour Cournot, un evenement est le resultat d'un hasard quand il est constitue par la rencontre de plusieurs series causales independantes. Cette definition est caracterisee par la realite objective de ces series. Ainsi Cournot se debarrasse de tous les elements subjectifs de l'idee de hasard. Mais c'est justement pour cela qu'il n'arrive pas a expliquer la formation de l'idee. Un evenement est appele fortuit quand nous cherchons sa raison et pourtant n'arrivons pas a la trouver. Selon Bergson Cette raison est d'abord supposee comme intention de la nature, puis perd ses contenus a cause du developpement de la science. Ce processus meme est celui d'une formation de l'idee de hasard.</p>
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000118-0205

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

偶然の観念について

西 山 晃 生*

L'idée de hasard*Teruo Nishiyama*

Nous disons pour un événement qu'il est le résultat d'un hasard, et pour un autre événement, nous ne le disons pas. Alors quelle est la différence entre les deux? Dans quelle condition un événement est appelé fortuit? C'est notre première question. Et pourquoi nous avons idée de hasard plutôt que nous ne l'avons pas? C'est la seconde question. Nous essayons de répondre à ces deux questions, à l'aide de deux théories de hasard, celle de Cournot et celle de Bergson.

Pour Cournot, un événement est le résultat d'un hasard quand il est constitué par la rencontre de plusieurs séries causales indépendantes. Cette définition est caractérisée par la réalité objective de ces séries. Ainsi Cournot se débarrasse de tous les éléments subjectifs de l'idée de hasard. Mais c'est justement pour cela qu'il n'arrive pas à expliquer la formation de l'idée.

Un événement est appelé fortuit quand nous cherchons sa raison et pourtant n'arrivons pas à la trouver. Selon Bergson cette raison est d'abord supposée comme intention de la nature, puis perd son contenu à cause du développement de la science. Ce processus même est celui d'une formation de l'idée de hasard.

* 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程

0. はじめに

偶然という語は日常的に用いられている。しかし、その意味は十分明らかになっているだろうか。われわれはある出来事が偶然生じたと言い、別の出来事に関してはそう言わない。したがって、偶然の結果起きたと考えられる出来事とそうでない出来事との間には、明確に意識されているにせよそうでないにせよ、何らかの違いが見出されているのでなければならない。その違いとは何か。出来事が偶然の結果とみなされるための条件とはどのようなものか。

また、偶然の観念は決して自明のものではない。われわれはもしかしたら偶然などというものについてまったく思い至らずに生きていくことができたかもしれないのに、そうはしなかった。したがって、偶然の観念はなぜ、どのようにして生じるのか、ということも問題になりうるだろう。

われわれは偶然に関するクールノーとベルクソンの記述を手がかりにして、これらの問いに答えてみたいと思う。まず節を改めて若干の予備的考察をした後、第2節でクールノーの、第3節でベルクソンの偶然論を検討する。

1. 予備的考察

われわれがある出来事を偶然生じたものとみなすためにはどのような条件が必要だろうか。まず、その出来事がわれわれにとって意味を持つものでなければならない。そうでなければ、われわれはその出来事について何か考えてみようという気にもならないからだ。しかし、われわれは自らにとって意味のある出来事をすべて偶然の結果とみなすわけではない。何か別の条件が必要とされているはずである。

よくなされているように、偶然をわれわれにとっての出来事の意外さ、思いがけなさによって定義してみたらどうだろうか。「思いがけない」出

来事という場合、二つの主観的要素、つまり出来事を経験する主体の側に帰せられる要素が含まれている。まず第一に、その出来事がわれわれにとって意味のあるものであるということ、第二にその出来事が起きると予測し得なかったということことである。第一の要素については既に述べた。ここで問題にしたいのは第二の要素についてである。われわれは実は、予測しえた出来事に関しても偶然という語を使いうる。たとえば、なんとなく事故に遭いそうな気がしていたら本当に遭ったというような場合、あるいはたいていの人がそうするように、当たることを祈りながら宝くじを買ったら本当に当たった、というような場合を考えてみよう。われわれはこのような場合にも、いやむしろこのような場合にこそ偶然という語を用いるだろう。これらの場合われわれは出来事が起こることを確信していたのではなく、漠然と思い浮かべていただけだから、「予測していた」とは言えず、したがってその思いがけなさを損なうものではないといわれるかもしれない。しかし、仮に事故に遭うことを確信していたとしても、あるいは自分の買った宝くじが当たることを寸分疑っていなくても、これらの出来事はやはり偶然起きたと言いうる。というのも、事故に遭う、あるいは宝くじが当たるのを信じることと、それらの出来事が実際に起こることとの間にわれわれは何の影響関係も見出すことができないからである。

こうした影響関係の不在をもとに偶然を考えたのがクールノーだった。次節でその議論を見ることにしよう。

2. クールノーの偶然論

2.1. 定義

クールノーの偶然論は原因の分析から始まる。「われわれが出来事と呼ぶものはすべて原因を持っている」¹⁾「人間理性の至高かつ統制的な原理」²⁾がそのように告げる。したがって、われわれがある出来事について

考えるとき、その原因を見誤ることはあっても、原因なしにすますことはできない。

さて、ある出来事の原因はそれ自体別の出来事の結果であり、さらに遡ってその原因を確かめることができる。世界のうちには無数のこうした原因と結果の系列が共存している³⁾。そしてそれらの系列は相互に連結あるいは依存していることもありえるし、独立していることもありうる⁴⁾。彼の偶然論は、すべてこの独立した諸系列、つまり相互に影響力を持たない諸系列が存在するということにかかっているといつてよい。次のような定義が得られる。

「因果性の秩序において、独立した諸系列に属す諸現象の組み合わせ *combinaison*、あるいは遭遇 *rencontre* によってもたらされる諸々の出来事は、偶然的出来事 *evenements fortuits*、または偶然 *hasard* の結果と呼ばれるものである」⁵⁾。

たとえば、ある人が鉄道で旅行をしていて事故に遭ったとする。この犠牲は偶然の結果である。「というのも、事故をもたらした諸原因はこの乗客がいたことに依存しないからである。」⁶⁾ 彼が乗っていようがまいが事故は起きたのだから、事故の原因と旅行者をこの車両へともたらした原因とは相互に独立しており、彼の犠牲はこれらの諸現象が遭遇した結果に他ならない、というわけだ。逆に、多くの人をひきつける何か興味深いものが〔沿線に〕あったため乗客が押し寄せ、業務に支障をきたしたことによって事故が起きたとすればどうだろうか。そのとき、列車の運行と乗客の選択という「最初は相互に独立していた原因と結果の系列は独立でなくなり、反対にそれらの間に緊密な連結の関係を認めなければならないだろう」⁷⁾。したがって、この場合、事故の犠牲になることは偶然の結果ではない。

2.2. 帰結

さて、この定義を見ればわかるように、クールノーにとって偶然は実体的な原因ではなく「独立した諸系列の遭遇」という観念である。この独立のあり方しだいで、偶然の観念の性格はずいぶん違ったものになるはずだ。諸系列が実際に独立していれば、この観念は世界のあり方を正確に表現したものであろうし、そうでないならば原因と結果との関係について無知を示したものにすぎないであろう。クールノーにとって独立とは、われわれが評価しうるような、あるいは覚知しうるような影響を諸系列が相互に示さないことである。「足元の地面を叩くことによって〔地球の〕対蹠点に行く船乗りを邪魔だてする、あるいは木製の衛星の体系を揺るがすなどとは誰も信じないであろう。」⁸⁾しかし、このことについてクールノーが比喩以上の厳密な議論を展開した形跡はない。

彼によれば、独立した諸系列が存在することは「常識」あるいは「良識」⁹⁾にとって自明のことなのである。それは証明すべきものであるというよりは、そこから議論を始めるべき出発点である。

さて、ここから以下のことが導かれる。まず第一に、偶然は決定論と対立しない¹⁰⁾。というのも、ある出来事があらかじめ決められた仕方で起きるということは、その出来事の諸原因が独立した因果系列に属すということと矛盾しないからである。さらに言えば、諸原因が相互に影響するかしらないかということ、出来事が必然的に起きるかそうでないかということは関係がないからである。したがって、あらゆる出来事の原因と結果をすべて見通すことができる超人間的知性にとっても、偶然は解消されない。

「人間よりすぐれた知性がこの点について人間と異なるのは、この理性の所与において人間より間違えることが少ないであろうということ、あるいはこう言ってよければ、決して間違えないであろうということのみである」¹¹⁾。

もちろんわれわれは諸系列の独立を見誤ることがある。そしてその結果、偶然でないものを偶然と呼んでしまうことも（あるいは、偶然であるものを偶然ではないと断じてしまうことも）ある。しかし、そのことは独立した諸系列が存在することと何ら矛盾しない。

第二に、主観的要素と偶然との関わりは否定される。因果的に独立した諸系列があり、われわれは「常識」あるいは「良識」によってそのことを知っている。その時点で偶然の観念はできあがってしまっていると言っている。したがって、そこに出来事がわれわれに対して持つ意味、たとえば前節で挙げた思いがけなさや意外さなどが入り込む余地はない。

「…出来事は、稀であり意外なものであるから偶然の結果だと形容されるべきなのではない。反対に、諸々の異なった結合が引き起こすであろう諸々の出来事のうちから、偶然によってそれらの出来事がもたらされるゆえにこそ、稀なのである。そして、それらの出来事は稀であるゆえにこそ、われわれにとって意外なのである。…たしかに日常的な言語においては、稀であり意外なものである結合が取り上げられるとき、偶然という表現が好んで用いられる。…しかし、日常的会話や世間的な言語において偶然の語に結び付けられる表現のニュアンス、あいまいかつよく定義されていないニュアンスは、より哲学的でより厳密な言語が話されるときには退けられねばならない」¹²⁾。

2.3. 問題点

クールノーの偶然論はこれまでさまざまな形で批判されてきた。そのうちのいくつかはまさに今述べた点、つまり主観的要素が排除されている点に関わるものである。たとえば、アンリ・ピエロンは以下のように述べる。

クールノーの定義は一般的すぎるため不適切に思われるし、不完全であるため一般的すぎるように思われるのである。そこには実際のところ、まさに本質的なものであると思われる人間的要素が、主観的要素が、現象の客観性を限界づけ制限するわれわれの自我への関係が欠けていると言える¹³⁾。

ピエロンは「独立した諸系列の遭遇」という定義自体を否定するわけではない。しかし、「大半の現象は独立した諸系列の遭遇に囚われている」のである以上、クールノーの定義に従えばほとんどの出来事が偶然の結果になってしまう。われわれは「自らのためにのみ偶然について語る」¹⁴⁾、つまり自らが関心を持つ出来事に関してのみ、それが偶然の結果かそうでないかを問題にするのだから、クールノーの定義では明らかに広すぎる。クールノーは偶然という言葉で呼ばれるものを十分限定していない。

クールノーが主観的要素を「哲学的でより厳密な言語」から排除し、日常的な感覚とはそぐわない偶然の観念をあえて提示しているのである以上、ピエロンのような批判はある意味では的外れである。しかし、こうした批判にまったく意味がないわけでもない。というのも主観的要素を排除したために、クールノーはわれわれの第二の問い、つまりなぜ、いかにして偶然の観念を持つのか、という問いに答えることができないからである。

クールノーはわれわれの第一の問い、つまりどのような出来事を偶然の結果と呼ぶか、という問いには非常に明確な仕方で答えた。しかし、そこでは偶然の観念が完成した形で与えられており、その形成のされ方が問われることはなかった。

偶然の観念が形成されるためには、われわれの側にある態勢が必要である。具体的に考えてみよう。われわれは何か起きたときに、そこに根拠を見出してしまうことがある。たとえば、「悪いことばかりしていたから

罰が当たった」というような言い方をわれわれはよくするし、そのような目的論的な説明を時には本気で信じたりもする。その場合、偶然の観念は遠のいている。また逆にすべてを機械的因果関係によって説明しようとする人にも、偶然の観念は縁遠いものだろう。つまりわれわれは、なぜその出来事が起きたのか、その根拠が明らかになっているときと、最初から根拠が問題にならないときには偶然の観念を持たない。したがって、偶然の観念が形成されるためには、1 出来事の根拠への関心があり、なおかつ 2 その根拠が明らかになっていない、のでなければならない。ベルクソンが偶然を論じるとき問題にしたのは、まさにこのようなことだった。

3. ベルクソンの偶然論

3.1. レヴィ=ブリュール批判

偶然に関するベルクソンの記述はレヴィ=ブリュールへの批判から始まる。レヴィ=ブリュールによれば、未開民族は自然法則への信頼を欠いている。彼らは「神秘的」あるいは「超自然的」原因（精霊や妖術師の意志など）に依存した形で出来事を理解するため、偶然を認めない。たとえば、「石が落ちて通行人を押しつぶす。それは悪意ある精霊が石を落としたからである。そこには偶然はない。ある男がワニによってカヌーからさらわれる。それは彼が呪術にかけられていたからである。ここには偶然はない」¹⁵⁾ といった具合に、である。これに対するベルクソンの批判は以下の三点にまとめられる。

1. 未開人は自然法則を信頼していないのではない。因果性に関する明確な表象を持っているわけでもないし、また持つ必要もないのだが、自然法則を信頼しているのでなければ日常生活を送ることもできないだろう¹⁶⁾。
2. にもかかわらず彼らが神秘的原因に依存するのは、そうしなければ説明できないような出来事に直面したときのみである。それは「人間

にかかわる出来事，とりわけある人に降りかかった災難 accident，より特別にはある人の病気あるいは死である」¹⁷⁾。ここで神秘的原因によって説明されるもの，「それは物理的結果ではなく，その人間的意味である」¹⁸⁾。(DS151, 強調はベルクソン) つまり，未開人は自然法則を信じる代わりに神秘的原因に頼っているのではない。両者はそもそも説明するものが違うのである。

3. レヴィ=ブリュールが未開人は偶然を信じないというとき，彼自身「偶然」という言葉を使っている以上，少なくともそれによって何かを表現しているはずである。偶然の観念を突き詰めていくと，彼自身(あるいは文明人一般)の思考も実は未開人と本質的に異なるものではないことがわかる¹⁹⁾。

ここで批判されているのは，文明人の心性と未開人のそれとを最初から二つに分けておいて一方に自然法則への信頼と偶然への信を，他方に神秘的原因への依存と偶然観念の不在を割り振るような仕方である。これに対してベルクソンは，文明人にも未開人にも共通する根源的な経験があり，そこから分岐した(あるいは文明人だけが経験したものがあつた)と考えている。

3.2. 根本的経験

そこで問題になるのは上に挙げた第二の批判点である。はたして，超自然的原因を想定するのは未開人だけだろうか。たしかにわれわれは精霊や妖術師の意志に出来事の説明を求めたりしない。しかし，誰でも持つであろう幸運や不運の観念はこれらと本質的に異なつたものではない。

まさに砲弾の破片によって傷を負つた兵士がわれわれに語つたところによると，彼が最初にしたことは「そんな馬鹿な」と叫ぶことだつた。純粹に機械的な原因によって射ち出され，誰にでも負傷を負わすかもしれない

が、誰も傷つけないかもしれないこの砲弾の破片が、他の人ではなく彼を打ったということ、それは彼の自発的知性にとって非論理的なことだった。「不運」を介入させたならば、この自発的知性と未開人の心性との親近性はより如実に現れていただろう²⁰⁾。

レヴィ=ブリュールが表象の内容に即して未開人と文明人を区別するのに対して、ベルクソンは表象の機能に注目して両者の間に本質的な同一性を見ようとする。未開人も文明人も、自分に対して重大な結果をもたらす出来事に遭遇したとき、(引用箇所の兵士のように)それに反応せずにはいられない。その反応は、出来事を引き起こした当のものに向けられるだろう。したがって、一どれほどはっきりとした姿をとるか、程度の差はあるだろうが一何かその出来事を引き起こした原因が想定されているのでなければならない。未開人における精霊や妖術師の意志という表象も、文明人における不運の表象も、こうした要請に応えるものに他ならない。

ここで言われている原因とは、機械的な作用のことではない。人は出来事が彼に対して持っている重大さ、つまりその意味に反応するのだから、原因のほうもそれに見合った意味を持つものでなければならない。したがって、内容はともかくその機能に着目するなら、これらの表象によって示されているのは、人に差し向けられて利益を、あるいは災いをもたらそうとする何ものである。それをベルクソンは「意図」と呼ぶ(ただし、その背後に完全な人格が想定されているわけでは必ずしもない)。この意図は、機械的作用に重なり合うような形で現れ²¹⁾、出来事がなぜ起こったか、その根拠を説明するだろう。レヴィ=ブリュールの考えに反して、自然法則を信頼することと超自然的原因を想定することは、未開人においても文明人においても両立しうる。

さて、われわれが自らに重大な利害をもたらす出来事に直面すると自然のうちに意図(たとえば善意や悪意)を見出してしまい、そうした意図が

出来事の根拠を説明するものだとすると、前節でわれわれが挙げた偶然の観念が成立するための条件に深刻な困難が生じる。というのも、重要な出来事には根拠が見出されることになってしまい、二つの条件は両立せず、したがって偶然の観念も成立しないことになってしまうからである。

ここで注目しておきたいのは、「意図」がどのような仕方で現れるかということである。ベルクソンによれば、それはわれわれが意識的に喚起するのではなく、おのずと生じてくるものだという。というのも、意図の表象は人間が知性を持ち始めたとき以来の「根本的経験」²²⁾ に根ざしているからである。

「今、反省が生じてきたとしてみよう。人間は自らを広大な宇宙の一点であるかのように知覚し、思考するだろう。もし、生きるための努力が彼の知性のうちへ、まさにこの知覚とこの思考が位置を占めているであろう場所へ、すぐさま〔それとは〕対立するイメージを、〔つまり〕事物や出来事が人間のほうを向いているというイメージを投げかけなければ、彼は道を失ってしまったと感じるだろう」²³⁾。

「事物や出来事が人間のほうを向いているイメージ」とは、機械的な作用のうちに自分に向けられた「効果ある現前」²⁴⁾ あるいは何らかの意図と一体化した「人格性の要素」²⁵⁾、つまり、世界を自分に対して何らかの関心を持ち影響力を振るうものとしてとらえる擬人的世界観である。そのようなものが経験の根底にある以上、われわれは意図という形で出来事の根拠を想定せずにはいられない。したがって、偶然の観念が成立するためには、何らかの形で意図の観念を退かせなければならないだろう。

3.3. 意図の後退

とはいえ、意図の観念は常にわれわれの思考を全面的に支配しているわ

けではない。それは自然に生じるものではあるが、「逃れやすく消え去りやすい」ものでもある。実際、科学的な説明方法の介入によって意図の具体的な姿は後退していき、その内容は空虚なものになるだろう。つまり、われわれが意図の主体を思い描くことはなくなっていくだろう。出来事は単に、われわれに益をなす、あるいは害をなすような仕方で生じるものとして現れてくる。こうした過程を経て、われわれが通常思い描くような偶然の観念が成立する。ベルクソンの最終的な定義は、偶然とは「あたかも意図があるかのようにふるまうメカニズム」²⁶⁾であり、別の言い方をすれば「内容を抜き取られた意図」²⁷⁾である、というものだった。逆に、未開人は自然に生じる意図の観念に（習慣や儀式の力によって）過剰な内容を与え、そうすることによって、（今われわれが使っているような意味での）偶然の観念からは遠ざかっていくだろう。レヴィ=ブリュールの誤りは、結果だけを見てその過程を追わなかったことに由来する。

われわれの言葉に置き換えると以下のようになるだろう。偶然の観念とは、われわれにとって出来事の根拠が見出せないということの意味する。しかしそれは端的に根拠が存在しないと考えることではない。自然のメカニズムが「あたかも意図を持つかのように現われる」ことによって根拠の存在は示唆されているにもかかわらず、その具体的な姿が明らかになっていないという事態である。

3.4. 問いへの答え

さて、ここまでベルクソンの偶然論を見てきたのは、「われわれはなぜ、いかにして偶然の観念を持つのか」という問い、より詳しく言えば「なぜわれわれは偶然の観念を持たずに済ますこともできたのにそうしなかったのか」という問いに答えるためである。そこで想定されていたのは意図による説明を信じきっている人と、逆にすべてを機械的因果性によって説明しようとする人だった。前者の思考には偶然の観念が入り込む余地はな

く、後者は偶然の観念を必要としない。

つまり、出来事の根拠がまったく疑われずにいるときも、逆に問題にもならないときも、偶然の観念は成り立たない。したがって、われわれが偶然の観念を持つためには1根拠に目が向けられ、なおかつ2疑われなければならない。ベルクソンが描いたのはまさにこの過程だった。

1. われわれは自分にとって意味深い出来事には必ず感情的な反応をしてしまう（先に引用した兵士の例を考えてみよ）。この反応は、意識されているにせよされていないにせよ、出来事の原因に向けられており、その原因のうちに意図という形で出来事が現に起こったようなものになった根拠を見出している。
2. しかし、ここで見出される意図＝根拠は、個々の出来事についてのものであり、様々な物事を一貫した形で説明するものではない。したがって、科学が発達し、科学の成果を取り入れるような形でわれわれの生活が営まれるようになるにつれて、それは説明方式としては退き、単に出来事の印象を彩るものとなっていく（私に害をなす出来事…）。

これらのうち、前者は人間の本性に根ざすものであり、後者は科学の発達、つまりより一般的な説明方式の進歩によってなされるものである。そして、そのどちらを欠いても偶然の観念が得られることはない。したがって、われわれはなぜ偶然の観念を持つのか、という問いには以下のような形で答えることができるだろう。偶然の観念はわれわれの本性によって準備され、知の努力（それは必ずしも個人的なものではない）によって最終的には得られるものである。われわれは偶然の観念を持つよう運命づけられてはいなかったが、方向づけられていたのである。偶然の観念を持たずに済ませるにはわれわれの科学は進歩しすぎてしまったし、また、偶然の観念無しで済ませるにはわれわれの本性は強固過ぎたのである。

結 論

ここまで述べてきたことを手短かにまとめてみよう。われわれはクールノーとベルクソンの偶然論を検討してきた。前者は独立した因果系列の遭遇という形で出来事の偶然性を規定し、後者はわれわれが自然のうちに見出してしまう「意図」の後退という形で偶然観念の成立を描き出した。前者はある出来事が「偶然の結果」と呼ばれるための条件を、後者は偶然の観念が形成される理由と過程を説明している。両者を接合しようとする試みもあるが²⁸⁾、どちらかの本質的な部分を犠牲にすることなくうまくいくとは思われない。というのも、クールノーが排除した心理的要素は、ベルクソンにとっては偶然観念の成立に不可欠な契機だからである。

本稿では冒頭に掲げた二つの問いに対してこれら二つの偶然論で答えるにとどまった。ベルクソンとクールノーの詳細な比較は今後の課題とする。また、通常偶然と結び付けられているテーマ、たとえば必然性や自由などとの関係も、別の機会に論じることにした。

註

本稿で参照されるクールノーの著作は以下のとおりである。クールノーからの引用はすべて全集版による。*Exposition*と*Essai*についてはページ数の前に節番号を付す。

1843: *Exposition de la théorie des chances et des probabilités; Œuvre complètes.*, t. I, édité par B. BRU, 1984

1851: *Essai sur les fondements de nos connaissances et sur les caractères de la critique philosophique; O. C.*, t. 2, édité par J.-Cl. PARIENTE, 1975

1875: *Matérialisme, vitalisme, rationalisme. Études sur l'emploi des données de la science en philosophie; O. C.*, t. 5, édité par Cl. SALOMON-BAYET, 1979

- 1) *Essai sur les fondements de nos connaissances et sur les caractères de la critique philosophique*, 1851, § 29, p. 33.

- 2) *Exposition de la théorie des chances et des probabilités*, § 39, p. 53.
- 3) *Exposition*, § 39, p. 54.
- 4) *Exposition*, § 40, p. 54. *Essai*, § 30, p. 34.
- 5) *Exposition*, § 40, p. 55.
- 6) *Essai*, § 31, p. 35.
- 7) *ibid.*
- 8) *Exposition*, § 40, p. 55.
- 9) *Essai*, § 30, p. 34.
- 10) *Matérialisme, vitalisme, rationalisme. Études sur l'emploi des données de la science en philosophie*, 1875, p. 41 なお, クールノーにおける偶然と決定論の両立可能性については, 以下を参照. Thierry Martin, *Probabilité et critique philosophique selon Cournot*, Paris, Vrin; 1996, pp. 126-136. *Oeuvre de Gabriel Tarde Seconde série Vol. 4 Philosophie de l'histoire et science sociale: la philosophie de Cournot*, edition et presentation de Thierry Martin. Paris, 2002, pp. 81-2.
- 11) *Essai*, § 36, p. 41.
- 12) *Essai*, § 32, p. 36.
- 13) Henri Piéron, 《*Essai sur le hasard. La psychologie d'un concept*》, *Revue de Métaphysique et de Morale*, 1902, No. 6, p. 688.
- 14) *ibid.*
- 15) *Les deux sources de la morale et de la religion*, 1932, p. 153.
- 16) *DS*, pp. 149-151.
- 17) *DS*, p. 150.
- 18) *DS*, p. 151. 強調はベルクソン.
- 19) *DS*, p. 154.
- 20) *DS*, p. 153.
- 21) *DS*, p. 155.
- 22) *DS*, p. 185.
- 23) *DS*, p. 186.
- 24) *DS*, p. 185.
- 25) *DS*, p. 163.
- 26) *DS*, p. 155.
- 27) *ibid.* ただし, ベルクソンは以下のようにも述べている。「偶然の観念は, いかにか自発的なものであっても, それが意識にのぼるのは, われわれが話すことを教えられて以来社会がわれわれのうちに積み重ねた経験の層を経た後で

偶然の観念について

しかない。観念はまさにこの過程のうちで空になるのであり、だんだん機械的になっていく科学は、この観念に含まれていた目的的なものを排除するのである。」(DS. pp. 155-156.)。ここでベルクソンが「偶然」と呼んでいるのは、おのずと生じる観念、つまり出来事が意図を持っているという観念そのものである。その目的論的な観念が徐々に空虚になっていく過程が（われわれが通常用いるような意味での）偶然観念の生成過程である。ベルクソンの偶然論を読むと、あたかも一方に目的論的な、他方に機械論的な二つの説明体系があり、その両者の中間に、どちらにも還元されないものとして偶然の観念が生じるように考えがちだがそうではない。

28) Piéron. *op. cit.*